

【最優秀賞】

あめこ

鳥井 優夏（神奈川県 鎌倉女学院高等学校 2年生）

そうしてどうするの。
明彦が初めて聞いた棗の声は、言葉尻にちよつとした茶目っ気のあるものだった。

それは覚えているのだが、何故だかその時の棗の表情を覚えていない。まあ、どうせ臆病な自分のことだ、目を逸らして聞いていたのだろうと想像して些か落胆する。落胆すると共に下げた視線の先には、なんだかごちゃごちゃ目にうるさい玩具箱のような推定五十メートル。ガキの頃に泳ぎ切つて喜んだ思い出深い距離だなあなんて思いながらぼんやり眺めて、背中に強い一陣の風が来るのを待っている。待ち詫びたそれが来たら、クロールでもして一直線にゴールまで向かつてやろうか。そしたらきつと世界一の水泳選手だ。世界最速だ。うんきつとそうだ。そんなみつともない自負でもこの胸に残せるのなら本望だと考えた。

そんな時に背中にべちつと、鈍い感覚。

「……」

それは待っていた風とは程遠い。それはべちつと、背中に跳ねてコンクリートの床に落ちる。

「……ちよつと」

べちつと。またしても。

「ねえ」

べちつと。

「勿体ないから、やめなつて」

うざつたくなって、やつと振り向いた先には推定一メートル。小脇を抱えた飴袋に手突っ込んで、次のべちつを生み出そうとしていた。そうか初めてこの子の声を聞いた時も今回みたいに背を向けていたから、表情なんて覚えていないわけなのかと一人納得し、足元の飴玉みつつをちよいちよい拾った。

「いっこ貰つていい？」

口寂しかったので図々しくもお願いすると、棗はふるふると首を振った。あれ、くれないのか。すこし傷ついた。

「ぜんぶあげる」

「……そっか、ありがと」

まあそんな回答だろうと予想していた明彦は既に封を切つていた包装紙をぱいっとマンション下に投げ捨てた。ひらひら、左右に逃げ道を探しながらも重力に従つて着実に落ちていく。そんな様子を上から覗き込みながら、遅いぞーなんて小声でせつついていると、棗がててと近づいてきて、明彦の足元でかがみ込んだ。

「ポイ捨て、だめなのにい」

屋上から見えるひらひらの景色を見下ろしながら、くぐもつた声で抗議する棗。じゃ、一緒に捕まえに行くかい、なんて、明彦が何でもない顔でおどけたように言うが、飴の包装紙がひらひら落ちていくのをじつと見ている棗は何とも返さなかった。明彦は

すこし悲しくなった。

棗という子供は、子供と言うには変に邪気のある、責任のない大人のような人間だった。明彦がこのマンションの屋上で背中を押し飛び切りの風を待っている時に、決まって棗はふらりと現れる。そうして現れては持ち前の自由な言動で明彦の、生きるのに無駄な気力を飴と一緒にべろりと平らげてしまうのであった。

はじめはただただ落ちるきつかけを待っていた明彦だが、今と成っては留まる口実を待つようになった。屋上の隅に立つて五分もすれば、背中から何かしらの合図がやって来る。最近では飴を投げるのが彼女の中で合図の主流となっているようで、飴を携えてやって来るのが棗の常となっている。

「ねえ次は飴じゃなくてさ、裂きイカとかにしたらっ。」

床に座り込み、ヘラヘラと飽きたように口内で飴を乱雑に転がしながら、厚かましくも要望に近い意地悪な提案を試してみる。すると棗はやっと顔を上げ、きよと、としたまんまるのお目目を明彦に向けて、彼の隣にぼしゅんと座りながら言った。

「ううん、飴なの。」

宙に投げ出した足をぶらぶらさせる棗。

「そっかあー、飴かあ。」

明彦も真似して足を伸ばす。

どうやら飴は譲れないようだ。オジサンとしては塩味が恋しいなあなんて思ったが、ただでさえ幼子に飴玉を与えて貰っている身だ。何も言えない。それに、棗は一応、明彦の命の恩人に当たるのだ。それらを考えるとそれ以上の駄々は憚られた。こんなチビでも人の命を助けられるんだなあ、と改めて感心する。いやそれほどばかりか、恐らく棗がいる限り、自分は本気で自殺することも

ないだろう。どうやら自分が思っている以上に明彦は棗に懐いているようだった。

過労自殺とはなんなのだろう。字からして完全に受動的なものではないのだから、必ず自己の内にタイマーにも似たスイッチがある筈だ。しかし、それを押すのもまた己であるから、そう考えると無限だろう。だからこそ思いとどまる時もあるのだろう。

つまり明彦の知る過労自殺者はふたつにわかれる。「この仕事が終わったら死ぬ」などと己の外なるものに判断を委ねたある意味での受動的な死。若しくは春の小川のように、ゆったりと何も考えずに着々と、無意識のうちに段階を踏んで死の大海へと流れ込む、受動的とも能動的とも言えない死。このふたつだ。

後者の場合、己はきつと特に何も考えずに死ぬのだろう。特に、生きていた時の云々なぞは頭から忘却し、自分が仕事から逃げようとしたかそうでないかとも思考外。微かに考えるのは死んでからの云々を（申し訳ないなどの感情は含まない。ただ段階をしたしと）考えているのだ。

自分の言葉で考えを纏めてみたものの、何分今まで所謂社畜という、人の命令や、裏の意図を察してほしいであるう助言に耳を傾け脳を通る間もなく体を耳に付き従わせるばかりの身であったから、自分の言葉になんとなくしっくりこない。だからといって幼子に聞くのも、——ちらりと棗を見る。

相変わらず、なにもなさそうにそよそよと風に吹かれていた。手には飴の袋、かちかちのコンクリート床に柔らく座って、遠くのビルを眺めていた。今まで難しいことを考えていた明彦の頭なぞまるで知らないようで、時折彼女の唇からは安堵の息がもれている。その様子にすこしばかり理不尽にもかちんときた明彦

は、のうのうとできないような無理難題を考えさせてみようと思
い立った。難題とは、言わずもがな、先程棗を見るまで己の頭を
固めていたものである。

「自殺のタイミングって、どう計るんだろうね？」

「それはね、飴玉」

突然の質問に、悩む暇もなく答える棗。これには明彦が面食ら
った。そうしてまた棗は、相変わらず片手で飴の袋をがさがさ演
奏しては、立ち並びこちらを見据える沢山のビルへとその音を風
で運ぶのだった。

明彦にとっては気味の悪い背中風の風だ。

「どうして飴玉？」

「ちょっとずつ溶けてくから」

袋に手をつ突っ込んでがさがさ、それから飴をひとつ取り出し
て、包装紙を器用に片手で剥いた。

「飴玉って、舐めてるとだんだんなくなるでしょ」

「うん」

「溶けないようにするのは、無理でしょ」

「うん」

「でも、口から出しちゃえば溶けないでしょ」

「うん」

「だからいいの」

「……うん？」

変に満足した顔で、棗は飴玉を口内に入れてコロコロと転がし
始めた。

ただ飴の話がしたかっただけなのだろうか。どうやら質問の意
図が伝わらなかったようで、その頭も全く悩むことはなかったら
しい。

明彦は落胆しながらも、やはりどこかしっくりきそうなむず痒
い顔でいた。まあ、なんせ相手は子供だと自分を宥める気持ち
と、棗は普通の子供ではないからという期待とを交互に入れ替え
ては、棗の人柄だけで彼女の発言の真意に良し悪しをつけようと
しているのだ。

すると突然、まだ口に入れたばかりであろう飴玉をがりりと噛
み砕く音がした。そんな顎の力が棗にあったとは、と驚くが、ど
こか耳触りの良いメロディに嘩然とする明彦。嘩然顔に青白い顔
を突き合わせた棗は、だからね、と言葉を始めた。

「飴玉、たまにはペッしちやっつていいよ」

それだけ言うと、へりからずりずりと尻を後退させ、宙にぶら
下げていた透き通る足を屋上の床に戻した。

どういう、意味だろうか。それを考えてみたいという追求心も
あったが、ふと肩の力が抜けたので、やめておいた。棗が子供だ
からというわけではない。はたまた面倒になったわけでもない。
言われたことを素直に聞いて、聞いたままにするという子供っぽ
い真似をしかしたかったのだ。それは所謂知らんぷりというや
つ。そんな子供じみたことが出来た相手は棗が初めてかもしれな
い。

「なんで」

ふと、棗が口を開いた。

「ん？ 何か言った？」

棗から明彦に話しかけるのは非常に稀なことだ。驚いた明彦が
食い気味に聞き返すと、棗はすこし俯いて返す。

「なんでいっつも日曜にここ来るの」

「……ああ」

そんなことかあ、と後ろに倒れる。もうちょっと踏み込んだ質

問が良かったららしい明彦はうだらんとした口調で答えた。

「会社休みだから。死ぬなら休みかなって。日曜以外は会社あるから来られない」

「なんで会社あるとだめなの」

「んー、だめだから」

「なくせないの？」

「なくせないの」

無言になった棗に、もしかして毎日でも来てほしいのかなんて淡い期待を抱く。誰しも、求められて悪い気はしない。たとえ相手が幼子だったとしても、いや寧ろ棗だからこそ、明彦にとっては気分のいいことだ。

しかし棗は、そんな期待とは裏腹に「じゃあ日曜も会社あったらいいのに」なんて、何でもない顔で至極冷静に言ってみせた。

「そしたらここ、来ないのに」

棗の言葉が脳内で解釈され終えた途端、驚目を見張る。

「来てほしく、ないの」

「ンッ」

首をかくんつと勢いよく縦に振る。

それを見た明彦は、すこし目の奥を揺らしてから「どうして？」にこりと笑ってみせた。どうやら棗に好かれていない自信より、棗に好かれてる自信のほうが勝ったらしい。

「会社あれば、飛び降りに来ないでしょ」

……ほらね、とでも言うように目を伏せる。溜飲が下がって大変満足している様子であった。

「日曜も会社あったら、もうとっくに飛び降りてるかもね」

「来れないの？」

「まあね」

「うんう……じゃあだめ。日曜あっちゃだめ」

この子は何故明彦が飛び降りようとしていたかをよくわかっていない。けれど、飛び降りてほしくないとは思っているようだ。明彦を慢心させるにはじゅうぶんな事実だった。

愛を注がれる役割を担う幼子に愛されるというのは、明彦にとってなかなか快感を伴うものである。何しろ彼は今まで都合の良い巧者として扱われてきたため、常に弱者でありたいという欲を孕んでいた。言ってしまうえば、明彦と棗のうやむやな恩人関係には、棗が明彦の望むもの全てであったことが起因しているのだ。ただひたすらに押されるのを待つ明彦の背中に棗の透明な声がかかったあの日から、明彦の待つものはただひとつである。自分より弱くあるべき棗に命を繋がる。まるで棗の腹の中でもう一度産み直してもらっているような感覚。甘いものだけ貰って、棗のよくわからない声を聞くだけ。たまらなくぎこちなく、心地良い。

いつか母さん、なんて呼んでしまいたいそうだが、ふざけるわけでもなく。